教会とは何か

～エペソ人への手紙から学ぶ～

講 師　神戸 基秀

高坂のぞみ教会

目次

はじめに …… 1

1　エペソ人への手紙について …… 4

2　教会――神の栄光を現す器（1:1–23） …… 6

3　神との和解、キリストにある平和（2:1–22） …… 9

4　教会――奥義の実現を伝える器（3:1–21） …… 13

5　一致した歩みの勧め（4:1–16）…… 15

6　教会のふさわしい歩み（4:17–6:24） …… 17

まとめ …… 18

参考文献 …… 19

はじめに

教会とは何でしょうか？　教会について学んだことがあるクリスチャンであれば、「キリストのからだ」や「クリスチャンの集まり」だと答える方がおられるかもしれません。しかし、教会が「キリストのからだ」であるということには、どのような意味があるのでしょうか。また教会が「クリスチャンの集まり」であれば、どのような集まりなのでしょうか。

今の時代、私たちは教会としてのあり方を見つめ直す必要に迫られていると思います。そのような状況下で最も重要なのは「教会とは何か」を考えることです。

本テキストでは、特に新約聖書のエペソ人への手紙から「教会とは何か」を学んでいきたいと思います。エペソ書は教会という存在の本質を伝え、またそれに基づく信仰生活の実践が教えられている素晴らしい手紙です。ある学者はこの手紙について「クリスチャンの教会で最も影響力がある書物のひとつ」と言っています[1]。それどころか「人類最高の著作」とまで評価している人もいるほどの[2]、芸術的な素晴らしさをもった手紙でもあります。

私たちはそのような手紙を通して、使徒パウロが教会について教えてくれたことを見ていこうとしています。本テキストを学んだ後もエペソ書を繰り返し学んでいくことは、私たちそれぞれのクリスチャン生活の土台を強めてくれることでしょう。

「教会」という用語について

エペソ書の内容に入る前に、まずは「教会」という専門用語――特に新約聖書に出て来る「教会」という用語がどのような意味を持っているのかを確認しておきましょう。

---

[1] Harold W. Hoehner, *Ephesians: An Exegetical Commentary* (Grand Rapids: Baker, 2002), 1.

[2] Ｆ・Ｆ・ブルース『エペソ人への手紙』山岸登訳（伝道出版社、1989年）6頁。

新約聖書の主な日本語訳（新改訳2017や聖書協会共同訳など）では、「教会」という言葉はほぼ常に**エクレシア**というギリシャ語の名詞を訳すときに使われています[3]。

エクレシアという語は、本来は人々の「集まり」を意味します。議会のような正式な集まりを意味することもあれば（使19:39）、デモ隊のような集まりを表すこともありました（使19:32, 41）。

この単語は旧約聖書の古代ギリシャ語訳（七十人訳）にも出て来ます。たとえば、エジプトを出たイスラエルが荒野で集まった集会（例：申4:10; 9:10; 23:1–3, 8）、ソロモンが集めたイスラエルの「全会衆」（Ⅰ列8:14, 15）、天使の集まり（詩89:5）などがエクレシアで表されています。種類は様々ですが、七十人訳でも「集まり」という基本的な意味は変わりありません。

新約聖書になると、エクレシアは特に信者（クリスチャン）の集まりを表すために使われるようになります。新約でエクレシアは全部で114回使われていますが、そのうち109回がクリスチャンの集まりに対して使われています。新約になると、エクレシアはほとんどクリスチャンの集まりを表す専門用語になっていると言えるでしょう。

そして、クリスチャンの集まりを表す109回のうち、62回がパウロの手紙に出て来ます。よって、新約に出て来るエクレシアについて考える上では、パウロの手紙を研究することが大切になります。

それでは、パウロはエクレシアという言葉をどのような意味で使ったのでしょうか。キリスト教神学の世界では、教会（エクレシア）の意味を説明するとき、よく**普遍的教会**と**地域教会**という２つの専門用語が使われます。普遍的教会とは、あらゆる時代のあらゆる場所にいるクリスチャン全体のことです。一方の地域教会とは地上にある実際のクリスチャンの集まりのことで、中でも特定の地域・場所にある集まりのことを指す用語です。

パウロの手紙で最も多いエクレシアの使い方は、たとえば「コリントにある神の教会」（Ⅰコリ1:2; Ⅱコリ1:1）、「ガラテヤの諸教会」（ガラ1:2）、「ユダヤの諸教会」（ガラ1:22）、「〇〇の家にある教会」（ロマ16:5; Ⅰコリ16:19; コロ4:15; ピレ2）など、**特定の地域や場所にあるクリスチャンの集まり**を表すというものです。地域教会という神学用語は、この使い方を表しています。

---

[3] ただし、エペソ1:23のように原文では代名詞が使われていて、意味を補足するために「教会」という語が付け加えられている場合もあります。

一方で、パウロは**地上の様々な場所にあるクリスチャンの集まり全体**をまとめて、単数形のエクレシアで表すことがあります（例：Ｉコリ12:28[4]; 15:9; ピリ3:6; Ｉテモ3:5, 15）。また、地上にある集まりであるかに関わらず、**イエス・キリストを信じて救われたクリスチャン全体**が単数形のエクレシアで表されていることもあります（エペ1:22; 3:10, 21; 5:23, 24, 27, 29, 32; コロ1:18, 24）。普遍的教会という神学用語は、こういった使い方を表しています。

しかし、パウロのギリシャ語だけを見れば、具体的な集まりを表すときにも、地上にある集まり全体を表すときにも、天国にいるか地上にいるかは関係ないクリスチャン全体を表すときにも、同じ「エクレシア」（集まり）という言葉が使われているのです。

私たちが教会について学ぶときに陥ってしまいがちな間違いのひとつは、普遍的教会と地域教会を分けて考えすぎてしまうことです。その二つをパウロが同じ言葉で表したからには、二つをバラバラにして考えるべきではありません。

たとえばコロサイ人への手紙では、パウロが宛先の人々をコロサイやラオディキアといった町々にある「教会」（エクレシア）と呼んでいます（4:15, 16）。一方で、彼はキリストを信じた人全体のことを「教会」（エクレシア）とも呼んでいます（1:18, 24）。同じ手紙の中で、普遍的教会と地域教会の両方が区別なしにエクレシアと呼ばれているのです。

ここから、ひとつのパウロの考え方が見えてきます。パウロにとって**地域教会とは、特定の地域・場所で普遍的教会の姿を現すクリスチャンの集まり**なのです。普遍的教会という大きく理想的なエクレシアがあり、その姿を、私たちの集まりが今いる場所で現していく。それが、地上にあるエクレシア（地域教会）のあるべき姿だと言えるでしょう。

普遍的教会と地域教会を互いに関わり合っているものとして見る視点は、エペソ人への手紙から「教会」について学ぶために非常に重要なものです。

---

[4] 第一コリント12:28の「教会」は単に信じて救われたクリスチャン全体を示すと見なされていることがあります。しかし、第一コリント12章の文脈で扱われているのは、お互いに聖霊の賜物を用いて仕え合う地上のクリスチャンの集まりです。よって、筆者はこの用例を「地上にあるクリスチャンの集まり全体」に分類しています。

– 1 –

エペソ人への手紙について

エペソ人への手紙の内容を見ていく前に、まずはこの手紙の**（1）著者**、**（2）宛先**、**（3）執筆状況**、**（4）執筆目的・テーマ**について簡単に確認しておきましょう。

（1）著者

手紙の著者は「使徒パウロ」です（1:1）[5]。

（2）宛先

宛先は「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たち」（1:2）と言われています。すなわち、エペソにいるクリスチャンたちが宛先です。

ただし、この手紙にはパウロの他の手紙にあるような「個人的なあいさつ」がありません[6]。また、この手紙の内容は様々な教会に広く当てはまるもので、第一・第二コリント、ガラテヤ、コロサイ書といった手紙にあるような特定の問題が扱われているわけではありません。よって、多くの学者はこの手紙がエペソを中心とする地域の町々で、様々な教会に回し読みしてもらうように書かれたものだと推測しています[7]。

エペソは当時の小アジア（現在のトルコ共和国の西端）にあり、エーゲ海に面する大都市でした。パウロは３回目の伝道旅行で、３年間に渡ってこの町で伝道活動をしました（使19:8–10; 20:31）。使徒の働きでは、エペソを軸にした伝道活動が大成功を収めたと書かれています（使19:10）。しかし、そこでパウロの活動に反対する暴動が起こり、彼はエペソを離れなければならなくなりました（使19:23–20:1）。その後何ヶ月か経ってから、パウロはエペソの南にある港町ミレトスにエペソ教会の指導者たち（長老たち）を呼び寄せ、別れのメッセージを語りました（使20:17–35）。

---

[5] 特に断りがない限り、聖書本文の引用は新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会によります。

[6] 奥田久良「エペソ人への手紙」『新実用聖書注解』（いのちのことば社、2008年）1655頁。

[7] 例：Hoehner, *Ephesians*, 79; Clinton E. Arnold, *Ephesians* (Grand Rapids: Zondervan, 2010), 28–29.

（3）執筆状況

パウロはエペソの人々の信仰や愛を「聞いている」と言っています（エペ1:15）。どうやら、彼はエペソを離れた後、ある程度時間が経ってからこの手紙を書いたようです。

また、手紙を書いている間、パウロは投獄されていたようです（3:1, 13; 4:1; 6:20）。使徒の働きの最後にはパウロが「まる二年間」、ローマで「自費で借りた家」で監禁生活を送ったことが書かれています（使28:30）。おそらく、エペソ書はその投獄期間中に書かれたと思われます[8]。この推測が正しければ、手紙は紀元60–62年の間に書かれました。

（4）執筆目的・テーマ

手紙の執筆目的やテーマについては、具体的な問題が扱われていないため、推測が難しいところです。いくつかの強調されているテーマが挙げられますが、本テキストの目的と一番関係しているテーマは教会の（クリスチャン同士の）「一致」というテーマです[9]。

エペソのような大きな国際都市にある教会では、身分・人種・文化など、信者同士の一致を妨げる様々な要素があったことでしょう。その中でも一番大きな溝を生んでいたのはユダヤ人信者と異邦人信者の対立だったようです。よって、パウロは（特に２章で）ユダヤ人信者と異邦人信者がキリストにあって一致させられていると力説しています（エペ2:11–22）。ユダヤ人と異邦人でさえ一致できるのが教会という集まりであるならば、その他のどのような溝であっても、教会では乗り越えられるはずです。それゆえ、パウロはクリスチャンにふさわしい歩みを教えるとき、まずは「平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」と教えているのです（4:3）。

パウロはこの手紙で、同じイエス・キリストを信じる私たちはキリストにあって一致させられているのだと伝えています。これがエペソ書の大きなテーマのひとつです。そして、これは私たちが「教会とは何か」を考えるためにとても大切な、また非常に現代的なテーマだと言えるでしょう。

---

[8] Hoehner, *Ephesians*, 96; Arnold, *Ephesians*, 50–52; ブルース『エペソ人への手紙』7–8頁。

[9] Arthur G. Patzia, *Ephesians, Colossians, Philemon* (Grand Rapids: Baker, 2011), 133–39; Hoehner, *Ephesians*, 102–4.

－2－

教会――神の栄光を現す器（1:1–23）

パウロはこの手紙の本文を、クリスチャンに与えられた救いの素晴らしさを通して、神の栄光をほめたたえることで始めています。1:3–14では救いや罪の赦しを含め、クリスチャンに与えられている救いと祝福の素晴らしさが様々な形で列挙されています。そして３節では、それらの祝福をすべて包括する形で「神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました」と言われています。

3–14節で最も強調されていることは、私たちの救いが「天地創造の前に」（４節、聖書協会共同訳）、「あらかじめ」（５節）、「みこころによる計画のままに行う方の目的にしたがって」（11節）定められていたということです。つまり、救われた私たちは神のご計画によってあらかじめ選ばれていたのです。

神は私たちを「御前に聖なる、傷のない者にしようと」、「この方」（キリスト）にあってあらかじめ選んでおられました（４節）。「傷のない者」という表現は「非難されるところがない者」と訳すことができます。イエスを信じたクリスチャンは、将来非難されるところが全くない者として完成するように選ばれています。これは神の選びであるため、クリスチャンの救いが完成することは確実なのです。

また、福音を聞いて信じたクリスチャンには、救いが完成して神の祝福を「受け継ぐことの保証」として聖霊が与えられています（13–14節）。聖霊なる神ご自身が保証であるからには、クリスチャンが祝福を受け継ぐことは確実なのです。

そして、クリスチャンに救いの完成が約束されているのは、何よりも神ご自身の栄光がほめたたえられるためです（６，12，14節）。神は必ず、ご自分の計画を実現することで、ご自分の栄光を現されます。よって、神の栄光を現すために約束された救いの完成は、必ず実現すると確信することができるのです。

エペソ書１章の前半には、救いの完成は将来実現することであり（４，10節）、同時にクリスチャンが既に「すべての霊的祝福をもって」祝福されている（３節）という視点があります。この「既に」しかし「未だ」という視点は、エペソ書全体で貫かれています[10]。

次に、パウロは神の「大能の力」、すなわち全能なる神の力の偉大さが、イエス・キリストという方に見られることを教えていきます。神は「キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせ」（20節）、また「すべてのものをキリストの足の下に従わせ」られました（22節a）。21節では、キリストが「すべての支配、権威、権力、主権」にまさる方だと言われています。「すべての支配、権威、権力、主権」という表現は天使や特に悪霊などの霊的に力ある存在を示すものです（参照：エペ3:10; 6:12; コロ1:16）。

キリストは天使や悪霊も含め、ありとあらゆる力を圧倒しておられる方です。パウロが言うには、そのような方が「すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられ」たのです（22節b）。「かしら」という言葉は直訳すると「頭」で、比喩的には権威や権力を表すために使われます[11]。22節後半で言われているのは、**キリストというすべての被造物の上に権威を持っておられる方が教会に与えられた**ということです。

22節は、エペソ書で「教会」（エクレシア）が出て来る最初の箇所です。そして、23節の前半で**教会は「キリストのからだ」である**と言われています。ここでは「頭」のイメージが、22節にあった権威のイメージから、実際の「体の頭」というイメージに移っているようです。パウロはキリストと教会の結びつきを、頭と体というイメージで語っています。

続けて、パウロは教会が「すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところ」だと言っています（23節b）[12]。キリストはすべての被造物の上に権威を持っておられる方です。ゆえに、キリストはあらゆるものを、あらゆる面で満たすことができます。そのような方が、教会を満たしてくださっているのです。20–22節aでは、キリストの権威が神の力の現れだと説明されていました。神はキリストによって、教会を通して、ご自分の「すぐれた力」（19節）を現されます。**教会は神の力、神の栄光、神の素晴らしさを現すための器**なのです。

---

[10] 「既に／未だ」という表現は神の王国の成就が既に始まっていて、将来完成するという終末論に用いられることが多いのですが、筆者はその意味で用いていないことにご留意ください。神の計画に「既に／未だ」という側面があることを頭ごなしに否定すべきではありません。大切なのは何が「既に」で何が「未だ」なのかを問い、明確にすることです（参照：Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever* [Silverton, OR: Lampion Press, 2017], 570–71）。

[11] 参照：Arnold, *Ephesians*, 115; Darrell L. Bock, *Ephesians* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 2019), 57–58.

[12] この文章は様々な訳し方が可能な、難解なものとなっています。本テキストでは紙面の都合で詳しい説明ができないため、新改訳2017で見られる多数派の読み方を用いることとしています。

これまで見てきたような「教会」の特徴は、たとえばエペソにあるクリスチャンの集まりのような、具体的なひとつの集まりではあり得ません。それでは、パウロはなぜ、いわゆる「普遍的教会」のことをエクレシア（集まり）という言葉で表したのでしょうか。

おそらく、パウロは将来完成するクリスチャンの集まりをイメージしていたのでしょう。既に申し上げたように、パウロはこの手紙の中で、神のご計画で将来実現することを今既に起こっているかのように語っています（例：1:3，21，22; 2:6）。特に2:6ではクリスチャンがともに復活し、ともに天上に座っているという将来の様子が過去形で語られています。「ともに」という強調は、クリスチャンがひとつになって復活し、ひとつになって天に座っていること――つまり、クリスチャン全員がひとつの「集まり」になっている様子を表しています。一方で、教会が栄光の姿で神の御前に立つことは、将来に実現することでもあります（5:26–27）。パウロはクリスチャン全員が天国で、神の御前でキリストと一緒に集まっているという視点から、クリスチャン全体を「集まり」と呼んでいるのでしょう[13]。

したがって、パウロはこの手紙の中で、完成した理想的な「教会」の姿を教えているのです。よって、今私たちが教えられている「教会」は、クリスチャン全員に将来与えられる完成形であると言えます。

この手紙を読んだ小アジアの町々のクリスチャンたちは「エクレシア」と聞けば当然、自分たちの集まりもイメージしたことでしょう。この地上で集まっている私たちもエクレシアなのであれば、理想的なエクレシアを目指して歩むのは当然のことです。しかし、そこには個々のクリスチャンの状態と同じく、「既に」と「未だ」のギャップがあります。

個々のクリスチャンは既に神に選ばれていて、既に祝福されています。しかし、救いの完成は将来与えられます。現実的には、今なお罪の問題を抱えています。それでも、私たちは既に神の子とされた者として、キリストの似姿という完成形を目指して歩んでいます。

それと同じように、教会は既に「キリストのからだ」であり、既にキリストが「満ちておられるところ」です。しかし、完成形に到達するのは将来なのです。現実的には、集う一人ひとりのクリスチャンが罪の問題を抱えているため、神の力と栄光を完ぺきに現す器にはなり切れていません。それでも、私たちは既にキリストのからだに結びつけられたお互いとして、約束されている教会の完成形を目指し、ともに歩むべきなのです[14]。

---

[13] Peter T. O'Brien, "Church," in *Dictionary of Paul and His Letters*, ed. Gerald F. Hawthorne and Ralph P. Martin (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1993), 125–26.

[14] この視点は、地域教会を扱ったGordon H. Lovikの論文でよく表されています（"An Historical Study of Special Revelation Concerning the Local Church," *Central Bible Quarterly* 15/3 [Fall 1972]: 38）。

－3－

神との和解、キリストにある平和（2:1–22）

エペソ書２章に書かれている内容は、この手紙にある神学的な教えの中心です。ここでは、教会とはユダヤ人信者と異邦人信者の両方からなる一つの「からだ」だと教えられています。当時、ユダヤ人と異邦人の間には大きな憎しみがあり、乗り越えられないだろうと思えるほどの「隔ての壁」がありました。キリストのからだである教会では、そのような隔ての壁すら打ち壊され、ひとつにされています。それならば、教会では他のどのような壁も打ち壊され、一致することができるはずなのです。

２章の前半では個々のクリスチャンが恵みによって救われた事実が教えられ（1–10節）、後半では救われたクリスチャンの集まりである教会について教えられています（11–22節）。言い換えれば、前半ではクリスチャンとはどのような存在かという**クリスチャン個々人のアイデンティティ**が教えられています。そして後半では、クリスチャンの集まりである教会とはどのような存在かという**教会のアイデンティティ**が教えられているのです。

パウロが前半（1–10節）で教えているクリスチャンのアイデンティティとは、**恵みと信仰によって、神の怒りから救われた存在である**というものです。パウロは最初から、異邦人とユダヤ人を区別して話を始めています。１節は「あなたがたは」と始まっていますが、エペソ書の「あなたがた」は主に異邦人信者を示しています。一方で、３節では「あなたがた」に対して「私たち」とあるので、これはパウロ自身を含むユダヤ人信者のことでしょう[15]。ここでは異邦人信者とユダヤ人信者が対比されています。

しかし、２章前半で言われていることは、実のところ異邦人信者もユダヤ人信者も状態は同じであるということです。異邦人は「自分の背きと罪の中に死んでいた者」でした（１節）。一方のユダヤ人も、実は「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」（3節）。生まれながら罪人であり、霊的に死んでいて、神の怒りを受けるべき存在だったという点では、異邦人信者もユダヤ人信者も同じだったのです。

---

[15] Carl B. Hoch, Jr., “The New Man of Ephesians 2,” in *Dispensationalism, Israel and the Church*, ed. Craig A. Blaising and Darrell L. Bock (Grand Rapids: Zondervan, 1992), 101では、エペソ書を通して「あなたがた」と「私たち」の区別が重要だと主張されています。

神が愛によってキリストを遣わされたことで、ユダヤ人も異邦人も死んでいた状態から生かされている状態へ――神の怒りを受けるべき状態から、怒りから救われた状態へ変えられました（4–5節）。具体的に言うと、キリストを信じる人は、神がキリストを通して与えてくださった「恵みのゆえに……信仰によって救われたのです」（8節）。救いというプレゼントを信仰によって受け取ることに、ユダヤ人か異邦人かは関係ありません。そのプレゼントを受け取るのは、ただキリストを信じる信仰によるのです。

私たちが救われたのは恵みによることであり、私たちが良い「行い」をしたからではありません（9節）。ここから発展させて、パウロは「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」と言っています（10節a）。私たちの「良い行い」そのものも、神は「あらかじめ備えてくださ」っています（10節b）。私たちが神の恵みによって選ばれ、創造され、救われた目的は、神が用意してくださっている「良い行い」をしていくことです。

11節から、パウロは個人から共同体へと話を移していきます。しかし、10節から繋がっていることを見落としてはいけません。個々のクリスチャンが「良い行い」をするように選ばれたのであれば、クリスチャンの集まりである教会も「良い行い」をする存在であるはずです。そして、パウロはクリスチャンたちが教会として「良い行い」をしていくための土台として、クリスチャン同士の一致について教えていきます。

11，12節では「あなたがた」（異邦人信者）が、救われる前はキリストから遠く離れていたことが強調されています。キリストはイスラエルの民に与えられた「契約」にしたがって、イスラエルの民のメシア（王）として来られました。しかし、イスラエル人ではない異邦人は、救われるまでキリストと何の関わりも持っていませんでした。

それが今、神の恵みにより、また「キリストの血」によって、異邦人であっても信者は「キリスト・イエスにあ［る］」者とされたのです（13節）。エペソ書では「キリストにある」といった表現が繰り返し出て来ます。この表現は「キリストのうちに」と訳すことができます[16]。私たちは恵みと信仰によって救われた結果、**キリストから遠く離れていた状態から、キリストの内側にいるという状態に移された**のです。

結果として、キリストは「ご自分において」、ユダヤ人信者と異邦人信者を「新しい一人の人に造り上げて平和を実現」されました（15節）。救われた結果、ユダヤ人が異邦人になるのではなく、異邦人がユダヤ人になるのでもなく、**両者がひとつになって教会という「新しい一人の人」になった**のです。

---

16 エペソ書では「キリストにあって」、「この方にあって」、「主にあって」などの類似した表現が38回も使われています（Hoehner, *Ephesians*, 103）。

クリスチャンが救われて「キリストのからだ」に繋がったということは、ユダヤ人信者と異邦人信者の間にある「敵意」が滅ぼされ（16節）、同じキリストを信じる者同士、ひとつにされたということもありました。このような、まさに奇跡と呼べることが起きたのは、キリストを教会に与えてくださった神の力によることでした[17]。

16節では、特に２つの「和解」が語られています。１つ目は「鉛直方向」の和解です。キリストの十字架によって救われた私たちはそれぞれ「神と和解させ」られました。２つ目は「水平方向」の和解です。キリストは十字架によって私たちを神と和解させただけではなく、ユダヤ人信者と異邦人信者の間にある「敵意」を滅ぼされました。ユダヤ人信者と異邦人信者がキリストにあって平和を得たということが、水平方向の和解です[18]。教会という「キリストのからだ」にあってユダヤ人と異邦人の和解が与えられているならば、それ以外のどのような「隔ての壁」も、既にキリストにあって打ち壊されているはずです。

パウロは続けて、教会が一致した集まりであることを表すため、３つの表現を使っていきます。１つ目の表現は19節にある「**同じ国の民**」です。これは、救われて教会の一員とされたクリスチャンたちが、みな等しく天の国籍を持っている（ピリ3:20）ことを教えているのでしょう[19]。

２つ目の表現は、同じく19節にある「**神の家族**」です。教会は本来、家族のようにひとつになって歩んでいく集まりなのです。

そして、３つ目の表現は「**主にある聖なる宮**」という建物（神殿）です（20–22節）。この神殿は「使徒たちや預言者たちという土台」の上に建っています。なお、ここでの「預言者たち」は旧約の預言者たちではなく、新約時代になって預言の賜物を聖霊から与えられた人々のことです[20]。より大切なのは、「キリスト・イエスご自身が」土台の「要の石」だということです。「要の石」もしくは「礎石」（新改訳第三版）は、建物の土台を形作る上で最も重要な石です。つまり、キリストという礎石なしに、この建物は成り立ちません。こうした土台の上に、「建物の全体が組み合わされて」います（21節）。そして、この神殿は「組み合わされて成長し」ている途上にあります。

---

[17] Bock, "'The New Man' as Community in Colossians and Ephesians," in *Integrity of Heart, Skillfulness of Hands*, ed. Charles H. Dyer and Roy B. Zuck (Grand Rapids: Baker, 1994), 160–61.

[18] 鉛直方向と水平方向という言葉遣いはHoch, "The New Man of Ephesians 2," 120から借用したものです。

[19] 「同じ国の民」は直訳すると「同じ市民」となります（新改訳2017注釈）。また、ピリピ3:20の「国籍」は直訳すると「市民権」となります。

[20] 預言の賜物について、詳しくは第２回ステップアップセミナーをご参照ください。

神殿のモチーフによって表されているのは、教会が「キリストにあって」、建物の建築材のように互いにしっかり組み合わさっているというイメージです。

私たちはクリスチャンとして、使徒たちと預言者たちという土台の上に「築き上げられ」ています。そして、それぞれ聖霊を与えられたお互いが組み合わさっていくことにより、教会という集まりそのものが「御霊によって神の御住まいとなるのです」（22節）。

エペソ書２章の内容の大切さは、いくら強調してもし過ぎることはありません。私たちクリスチャンは恵みと信仰によって、神に喜ばれる「良い行い」をしていくために救われました。そんな私たちは今、教会という「キリストのからだ」の一員とされています。よって、私たちは教会という集まりとしても「良い行い」をしていくよう選ばれていると言えます。そして、私たちが教会としての役割を果たしていくために、神はご自分と私たちの間にある平和だけではなく、私たち同士の平和も与え、私たちが一致して歩むことができるようにしてくださったのです。

以上の内容は、パウロが言うには、私たちが今実際に一致できているかどうかに関係なく、神が既に与えてくださっている祝福です。

－4－

教会――奥義の実現を伝える器（3:1–21）

エペソ書３章の前半では、パウロが「奥義」について語っています（2–13節）。「奥義」とは、前の時代（旧約時代）には知らされていなかったけれども、今の時代（新約時代）になって新しく知らされた真理のことです（５節）。

６節に書かれている「奥義」の具体的な内容は、2:11–22で教えられていたことの要約です。すなわち、キリストにあって異邦人信者も教会という集まりのメンバーとなり、ユダヤ人信者とひとつになるということが、ここでパウロが伝えている「奥義」なのです。

メシア（キリスト）によって異邦人も救われるということは、旧約聖書の中で既に教えられていたことです（例：イザ49:6; 52:15）。しかし、メシアによってユダヤ人信者と異邦人信者がひとつの「からだ」になるということは、パウロをはじめとする新約時代の使徒たちに初めて明らかにされたことでした。

パウロが「奥義」を啓示されたことの素晴らしさを声に出している中で、10節に「教会」（エクレシア）という言葉が出て来ます。そこでは「天上にある支配と権威に、教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされる」と言われています。ここでの「天上にある支配と権威」は、おそらく天使と悪霊の両方を含む、霊的な力ある存在のことです。そういった存在に対して、「教会を通して神のきわめて豊かな知恵が知らされ」ます。

それではどのようにして、教会を通して神の知恵が天使や悪霊に知らされるのでしょうか。９節との繋がりからは、「奥義の実現がどのようなものなのか」を示すことで、神の知恵が知らされるのだろうと推測できます。

したがって、キリストにあってユダヤ人信者と異邦人信者がひとつになっている（教会において一致している）という奥義の実現を見ることで、天使は神様の圧倒的な知恵と御業の素晴らしさをほめたたえるのでしょう。そして、悪魔や悪霊は神の圧倒的な知恵と御力を思い知らされるのでしょう。

私たちはエペソ書１章から、教会は「神の栄光を現す器」であることを学びました。それをより具体的に言い表せば、教会は**奥義の実現を伝える器**として、神の栄光を現すのです。

以上のことは、第一義的にはユダヤ人信者と異邦人信者の一致に関する教えです。しかし、これは教会という集まりが一致すること一般にも適用できるでしょう。

キリストにあって信者同士の和解と教会の一致が与えられたということは、神の恵みです。ある新約聖書学者はエペソ書の注解書の中で、教会とは「神がキャンパスに描いておられる恵みの絵」であると表現しています[21]。教会という集まりは、神の恵みを身をもって現していく神の芸術作品なのです。

また、10節の内容は、第一義的には普遍的教会（救われたクリスチャン全体）について言われていることです。しかし既に確認したように、普遍的教会について言えることは、基本的に地域教会にも適用されます。私たちが地上で集っている集まり（エクレシア）が互いに一致して歩んでいくことで、神の御力は確かに働いていることが示されます。そして、教会がこのような役割を担っているということは、「私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた、永遠のご計画の一部」なのです（11節）。

[21] Bock, *Ephesians*, 101.

－5－

一致した歩みの勧め（4:1–16）

エペソ書４章から、パウロは今まで教えてきたことの適用として、クリスチャンがこの地上でどのように歩んでいくべきかを具体的に教えてくれています。

まず、パウロは読者に対して「召されたその召しにふさわしく歩みなさい」と教えています（１節）。「召し」については、エペソ書の文脈では単に救いに選ばれたというだけではなく、教会（キリストのからだ）の一員として選ばれたという意味合いもあると考えられます[22]。よって、パウロはここで「神によって救いに選ばれ、キリストのからだのメンバーにされた者としてふさわしく歩みなさい」と言っているのです。

「ふさわしい歩み」がどのような歩みであるかは、次のように教えられています。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい。」（２–３節）

上記の文章でメインになっている命令は「御霊による一致を**熱心に保ちなさい**」です（３節）。一致を「保つ」ということは、**一致が既に与えられている**ことを示唆しています。平和を与えてくださったキリストの十字架の御業により、また私たちをキリストのからだにつなぎ合わせてくださった聖霊の御業によって、一致は既に与えられているのです。その一致を保つことに熱心になるのがクリスチャンとして、教会としてのふさわしい歩みです。

一致を保つための姿勢は、具体的に「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて」と言われています。ここでは、特に「**謙遜と柔和**」に注目しましょう。イエス・キリストは、パウロが使っているのとほぼ同じギリシャ語を使って「わたしは心が**柔和**で**へりくだっている**」と言われました（マタ11:29）。順番は逆ですが、謙遜と柔和はキリストが示された姿勢であると言えます。

まず「謙遜」とは、自分を低くする姿勢のことです。自分の名誉や名声を第一にするのではなく、相手をほめたたえるという姿勢です。聖書における謙遜は、まず自分を低くして誰

[22] Hoehner, *Ephesians*, 504–5.

よりも神をほめたたえるという姿勢です。同時に、人間関係において自分を相手より低いものとする姿勢でもあります。

次の「柔和」は、ギリシャ語では「自分を制御する」というニュアンスを持っています。特に、怒りや興奮を抑えて冷静になるといったときに使われる表現です[23]。

自分よりも相手を高くする謙遜の姿勢と、人間関係の中で冷静さを保つという柔和の姿勢があり続ければ、私たちの人間関係が教会の一致を壊すということはなくなるでしょう。しかし、その結果もたらされる一致が「御霊による一致」だと言われていることから分かるように、謙遜と柔和は単に私たちの努力で得られる姿勢ではありません。この姿勢は、私たちの内におられる聖霊の助けによって得られるものです（ガラ5:22–23参照）。

さて、パウロは一致の大切さを伝えた後、７節からクリスチャン一人ひとりに聖霊の賜物が与えられているという話に移ります。教会は一致したひとつの「からだ」であると同時に、その中で一人ひとりに違った役割が与えられているのです。

クリスチャンに与えられている役割の具体例としてパウロが挙げているのは「使徒」、「預言者」、「伝道者」、「牧師また教師」です（11節）。つまり、教会という群れを導く指導者たちが取り上げられています。キリストが教会にそのような人々を与えてくださったのは、「聖徒たちを整えて奉仕のはたらきをさせ、キリストのからだを建て上げるため」です（12節）。このことは、16節でより具体的に説明されています。「キリストのからだを建て上げる」とは、「からだ全体」が「組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分がその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられること」です。

よって、群れの指導者の働きとは教会が一致し、互いに愛し合い、互いに成長していくために仕えることだと言えます。

しかし、神から役割が与えられているのは指導者だけではありません。教会が建て上げられていくために必要なのは、一人ひとりの信者が愛をもって「奉仕の働き」をし、成長していくことです（12–13, 16節）。

したがって**教会とは、クリスチャンが互いに愛し合い、互いに仕え合っていく集まり**だと言っても良いでしょう。その集まりの背骨は真理を学ぶこと（御言葉から神について学ぶこと）です（13–15節）。そして、学んだことに応答して互いに愛し合い、仕え合い、謙遜と柔和をもって一致を保っていく。これが、エペソ書が伝える教会の姿です。

---

[23] Arnold, *Ephesians*, 230; 参照：Hoehner, *Ephesians*, 506–7; Moisés Silva, ed., *New International Dictionary of New Testament Theology and Exegesis*, 5 vols. (Grand Rapids: Zondervan, 2014), 4:123–26.

－6－

教会のふさわしい歩み（4:17–6:24）

エペソ書４章後半以降は、前半で教えられていた教会のふさわしい歩みについて、さらに具体的な教えが続いています。それらすべてを取り上げることはできません。ここでは、エペソ書で最後に「教会」という言葉が出て来る5:21–33に注目してみましょう。

パウロはここで「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」と教えています（21節）。その具体例として、まずは夫婦が互いに従い合い、愛し合うことが教えられています（22–33節）。その中で、パウロはキリストと教会の関係を結婚関係にたとえています。このたとえも、頭と体の関係のたとえ（1:22–23）と同じように、強調点は**キリストと教会が一体である**というところにあります。パウロは「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」という創世記2:24の結婚関係の教えを引き合いにして、キリストと教会もそのような関係にあると教えています（31–32節）。

キリストは夫として、妻である「教会を愛し、教会のためにご自分を献げられ」ました（25節）。それは「教会をきよめて聖なるものと」し、将来栄光の姿に変えられた教会を「ご自分の前に立たせるため」です（26–27節）。このとき、キリストと教会の結婚関係は完成することになります（黙19:7–8参照）。

教会が整えられ、理想的な姿に完成させられることは、夫であるキリストご自身の働きによるものです。よって、教会が妻として、夫であるキリストに従うのは当然です（23–24節参照）。パウロはこの考え方を適用して、妻は教会がキリストに従うように夫に従い、夫はキリストが教会を愛するように妻を愛せと教えています。

ここで教えられているキリストと教会の関係は、夫婦に限らず、私たちが教会の中で互いに従い合うことにも適用できるでしょう。私たちは「キリストのからだの部分」で、キリストによって養い育てられているお互いです（29–30節）。私たちすべてのクリスチャンがひとつになるとき、キリストの妻として完成します。よって、私たちは個人としても教会としても、御霊の助けにより、謙遜と柔和をもって、互いに従い合うことで、一致を熱心に保つことが求められています。

まとめ

最後に、本書でエペソ書から教会について学んだ事柄を整理してみます。

1. エペソ書で見られる教会の特徴は、完成した理想的な教会が持っている特徴である。

2. 教会とはクリスチャンの集まりである。クリスチャンは天地創造の前からキリストにあって神に選ばれ、福音を信じて恵みによって救われ、天上にあるすべての霊的祝福を受け継ぐ人々である（1:3–14, 22b; 2:8）。

3. 教会は、すべての被造物の上に権威を持っておられるイエス・キリストを「かしら」とする「からだ」である（1:22）。

4. 教会は神の力、神の栄光を現すための器である（1:23）。

5. クリスチャンは個人として、また教会として、神が備えた「良い行い」をしていくために選ばれ、創造され、救われた（2:1–22）。

6. 教会はユダヤ人信者と異邦人信者がひとつになった「新しい一人の人」である（2:15）。

7. 教会はともに天の国籍を持つ人々の集まりである（2:19）。

8. 教会は神の家族である（2:19）。

9. 教会は神の住まい（神殿）にたとえられる。クリスチャンはキリストを要の石とする使徒たちと預言者たちという土台の上に、ともに築き上げられている（2:20–22）。

10. 教会は神の奥義の実現を体現することで、神の栄光を現していく器である（3:10）。

11. 教会にとってのふさわしい歩みとは、与えられた一致を熱心に保っていくことである（4:2–3）。

12.教会の信者一人ひとりには、聖霊の賜物とふさわしい役割が与えられている（4:7–16）。教会は一人ひとりが整えられ、自分の役割を担って仕えていくことで成長する。

13.キリストと教会は夫婦のように結ばれ、一体となっている（5:31–32）。キリストは妻である教会をきよめ、将来栄光の姿でご自分の前に立たせてくださる（5:25–27）。

参考文献

Arnold, Clinton E. *Ephesians*. Zondervan Exegetical Commentary on the New Testament. Grand Rapids: Zondervan, 2010.

Bock, Darrell L. *Ephesians: An Introduction and Commentary*. Tyndale New Testament Commentary. Downers Grove, IL: InterVarsity, 2019.

_____. "'The New Man' as Community in Colossians and Ephesians." Pages 157–67 in *Integrity of Heart, Skillfulness of Hands: Biblical and Leadership Studies in Honor of Donald K. Campbell*. Edited by Charles H. Dyer and Roy B. Zuck. Grand Rapids: Baker, 1994.

Hoch, Carl B., Jr. "The New Man of Ephesians 2." Pages 98–126 in *Dispensationalism, Israel and the Church: The Search for Definition*. Edited by Craig A. Blaising and Darrell L. Bock. Grand Rapids: Zondervan, 1992.

Hoehner, Harold W. *Ephesians: An Exegetical Commentary*. Grand Rapids: Baker, 2002.

Lovik, Gordon H. "An Historical Study of Special Revelation Concerning the Local Church." *Central Bible Quarterly* 15/3. Fall 1972: 26–43.

O'Brien, Peter T. "Church." Pages 123–31 in *Dictionary of Paul and His Letters*. Edited by Gerald F. Hawthorne and Ralph P. Martin. Downers Grove, IL: InterVarsity, 1993.

Patzia, Arthur G. *Ephesians, Colossians, Philemon*. Understanding the Bible Commentary Series. Grand Rapids: Baker, 2011.

Silva, Moisés, ed. *New International Dictionary of New Testament Theology and Exegesis*. 5 volumes. Grand Rapids: Zondervan, 2014.

Vlach, Michael J. *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God*. Silverton, OR: Lampion Press, 2017.

奥田久良「エペソ人への手紙」（宇田進・富井悠夫・宮村武夫〔編〕『新実用聖書注解』いのちのことば社、2008年、1654–73頁）

ブルース、F・F『エペソ人への手紙』（山岸登訳、伝道出版社、1989年）